

対話通訳実践中の通訳者の自発的発言についての考察 —新生児訪問模擬通訳場面における通訳規範の分析から—

飯田奈美子 日本学術振興会/立教大学

1. はじめに

日本語ができないクライアントと専門家が対話を行う対人援助場面において、通訳者が両者のやりとり（対話）を
通訳する。このような対話通訳実践において、通訳者は両者の発言を訳出する「通訳行為」だけでなく、通訳者自身が
発言を行う「自発的発言」も行っている。通訳者の自発的発言は、通訳規範や通訳倫理の「正確性・中立性」から逸脱
するものである。通訳規範や通訳倫理の逸脱についての研究は、通訳者に対するインタビュー調査により、通訳者が
異文化コミュニケーションの橋渡しの役割を担っているという現状を報告しているものが多い（瀧本 2006, 灘光
2008, 水野 2013 など）。他方、通訳規範逸脱に関する通訳実践の分析を行った研究としては、吉田（2007）や新崎
（2010）がある。吉田（2007）は、Goffman（1981）のフッティングの概念を援用し、通訳を介した談話の分析により、
レジスターを保持した訳出を困難にしている要因を考察すると同時に法廷相互行為の特徴を記述している。また、新
崎（2010）は、会議通訳者の訳出内容を分析し、通訳者が訳出中に意図的に行う「不変・不介入原則」からの「逸脱行
為」は「コミュニケーション仲介者」の役割を果たすコミュニケーション調整として、コミュニケーション調整理論
（Communication Accommodation Theory）を用いて分析している。上記の研究では、おもに訳出における通訳規範
の逸脱についての分析が行われていて、通訳者の自発的発言についての分析は行われていない。対話通訳実践におい
ては、程度の差はあれ、通訳者は何かしらの自発的発言を行っているにもかかわらず、通訳者がどのような自発的発
言を行っているかについての具体的な研究はなされていない。そこで、本研究は対話通訳実践中に行われる通訳者の
自発的発言に注目し、どのような自発的発言があり、それが通訳行為にどのように影響を与え、通訳実践をどのよう
に組織化し秩序立てているかを明らかにすることを目的とする。

2. 研究方法

本研究は、新生児訪問場面を再現し、保健師とクライアントの会話を通訳者が通訳を行い、その様子を録音・録画し
会話分析の表記法に則って作成したトランスクリプトを用いて、通訳者が通訳実践中に訳出行為ではない行為を行っ
た場面を収集し、会話分析・相互行為分析法にて分析を行った。新生児訪問は、保健師が母子の健康状態を把握し、世帯
の状況にあった助言指導をすることが目的となっている。近年、育児の孤立化により過度の育児不安や育児ストレス
を抱える母親が増加していることから、保健師や助産師による新生児訪問の全戸訪問指導が展開されている。母親が
外国人等で日本語ができない、子育て協力者や相談する人がいない場合、リスクが高まるため支援対象となり、通訳
を介したコミュニケーションがとても重要となる。また、出産や子育ては文化的影響を大きく受けるライフイベント
であるため、要通訳者両方の言語や文化を理解している通訳者の介入が起りやすい場面でもあることから、新生児
訪問場面を設定しデータ採取を行った。

3. 通訳規範

通訳研究において通訳規範については翻訳規範理論が援用されている。ギデオンのトウワリーによれば、翻訳規範
は、翻訳に関して「何が正しいか間違っているか、何が適切か不適切かについて、コミュニティ内で共有されている一
般的な価値や志向であり、ある状況にとって適正で適用可能な行為の指針」と述べている（Toury 1995: 54-55）。
佐藤美希は、社会や文化がどのような翻訳を求めるかは様々な交渉によってその合意が形成され慣例化し、その結果
としてある翻訳規範が生じると述べる（佐藤 2005: 65）。通訳規範の生成も通訳者が社会や文化が一定の性質をも
った通訳を求めて、様々な交渉を通じて合意が形成されて通訳規範が生じると考えられる。通訳倫理は守るべき原則や
価値が抽象的に記されているのに対し、通訳規範は現場のフィードバックを基に、通訳者がより良い対応と認識する
具体的な行為について通訳の対象者たちと合意が得られたものであると言える。

本研究では、通訳者が自発的発言によって、2つの通訳規範を遵守や逸脱を行っていることがわかった。その通訳

の訳出をするという発話連鎖が挿入されている。この発話連鎖が入ることで発話が拡張され、もともとの保健師の発言(1-6行目)の訳出(32-33行目)が後ろにきているのである。そして、36行目の通訳者の発話は、直前の父親の発話(34-35行目)を訳出するのではなく、通訳者の自らの行動を説明する発話になっている。通訳者が小児科リストが保健センターにあるという説明を父親に通訳した後、父親がそれに対して応答しているのだが(34-35行目)、通訳者はその位置で父親の発言を訳出せずに、「小児科リストのことを伝えた」と保健師に自分の行動を説明した後に父親の発言を訳出している(38行目)。36行目の発話の「伝えました」は直前に行った自分の行為(どこの部分を訳出したか)を説明し、さらにそれが終了したことも表している。これにより、訳出の位置がずれたことを説明し(トラブル発生)、さらにそれが処理されたことも併せて報告されている。そして、この報告があることで、34-35行目の父親の発言は、1-6行目の保健師の発言に対する応答であることがわかるようにデザインされているのであった。

このように本来ならば、訳出を行わなければならない発話順番において、自分の行為を保健師に説明するのは、訳出すべき原発話がだいぶ以前に産出されており、挿入連鎖が入ることで通訳行為が長くなり、訳出が遅れたことを伝えるためであった。逆に言えば、このように説明しないときは、通訳者は直前に発話されたものを訳出しているといえることができる。通訳者は、直前に発話されたものを訳出するという規範があることによって、訳出が遅れるなどすぐに訳出ができない場合は、そのことに対する説明を負う義務が生じてくるのだ。直前に発話されたものを訳出するという規範は、通訳者要通訳者ともに持っており、通訳者はその規範に沿うように通訳を行っていくことを目指していることを表している。しかし、通訳者がどのタイミングで訳出(発話)できるのかは、保健師とクライアントと通訳者の3者の共同的達成で決まるものであり、必ずしも要通訳者が発話をした直後に訳出ができるとは限らない。そのため、規範から逸脱する(直後に訳出ができない)場合は、自らの行為を説明する(どこで訳出したか)必要がでてくるのである。

5.2 通訳規範〈B. 通訳者は原語で理解されたときに起きる反応を目標言語の聞き手に起こす〉

「③訂正」は、発言が終わればすぐに訳出が開始されなければならないのだが、発言内容が求められる返答ではないと考えられる場合、通訳者は次の順番に求められること(訳出)をせず、発言者に対して訂正を開始するのである。

【抜粋2】

- 01 保健師：aa、分かりました。お母さんが∴、えーと、いらっしゃるときというのは、具体的にはいつになります？
02 あ、大学も行ってらっしゃるんですね。
03 通訳者：a 她妈妈在的时候是∴，大概是什么时候呢？(日本語訳) 彼女のお母さんがいるときは、だいたいいつですか？
04 父親：en∴∴
05 通訳者：[現在去大学，(日本語訳)今は大学にっている、
06 父親：[日本的(.)日本的制度就是，三个月以内。在日本在留时间。
(日本語訳)日本の制度は3か月以内、日本に滞在できる時間。
07 通訳者：en,en
08 父親：短期在留，三个月以内。(日本語訳)短期滞在は3か月以内。
09 通訳者：en
10 父親：如果我:也去学校，然后:妻子也去学校。这个时候，就有∴∴:妻子的妈妈带,看小孩儿。
(日本語訳)私が学校にいき、妻も学校に行く、このようとき妻のお母さんが子どもをみる。
11 →通訳者：o 她:的意思呢，就说，e 在学校，是什么时候，大概是什么时候，在学校。什么时候，在家里，照顾小孩
12 儿。
(日本語訳)彼女の言っている意味は、学校はいつあるのですか。大体いつ学校にいますか？いつ家にいて子どもの世話をしますか？
13 父親：o ↓一般是上午∴∴:十点:到:十一、十二点，这一段时间去学校。或者是下午的:一点，两点半到四点，[去学校。
(日本語訳)一般的に午前は10時から11、12時までこの間に学校にいきます。または午後は1時から2時半から4時まで学校にいきます。
(14-19 中略)
20 通訳者：あの、先ほどですね、あの、ちょっと:まあ、回答が∴、あの∴∴、お聞きになられた回答ではなかったので、
21 もう一度聞いたん(h)ですけれども(h)。
22 保健師：ええ、ええ、ええ。

【抜粋2】は、保健師が新生児訪問の際に家に不在にしている子どもの母親についての質問を行なっている場面である。父親は、保健師の質問の訳出(3行目)を聞いて、「彼女のお母さん」は子どもの祖母だと思い、祖母について答えるのであった。しかし、通訳者は父親の発話を訳出せずに自発的発言にて訂正を行っている。

この抜粋の前段で、保健師は父親に対して授乳(おっぱいとミルク)について質問を行い、父親から回答を得て、1-2行目の質問が行われた。そのためこの質問の意図は、ただお母さんの在宅を質問したものではなく、いつ母乳をあげ

るのかをきくための質問という構図がデザインされていたのである。従って、ここでの「お母さん」は子どもの母親を指しており、通訳者もそれを理解して訳出をしている。しかし、父親はそのようには理解しなかった。それは、通訳者が保健師の発話のすべてを訳出しきれてないうちに父親が回答を始めたことによる。3行目の「大概是什么时候呢?」は疑問形となっているため父親は順番構成単位が終了に近づいていると理解してターンの移行を予期し、4行目の「en...」と発話しターンを取得しようとする。しかし、すぐに通訳者が5行目で残りの部分の訳出をしたが、この部分に重なるように父親が発話を開始し(6行目)、通訳者の5行目の訳出は聞こえていない、もしくは3行目の発話のみで回答を準備したといえる。5行目の訳出を聞かずに発話を行っているので、父親は成員カテゴリー装置(Sacks 1972/=1989)における家族カテゴリーとしての「母親」しか理解しておらず、学校カテゴリーの「学生」の部分については聞いていなかったのである。この世帯では赤ちゃんの世話をする女性は母親と祖母の二人おり、その二人を区別するには「学生」である母親という表現が重要になってくる。それを父親が聞きのがしたことにより理解の相違ができてきたと推測される。このように訳出の途中で次の発話が始まってしまい十分に理解されないことは対話通訳の実践においてよく発生することである。そして、13行目で父親は、通訳者の発話(11行目)を聞き「状態の変化を示すトークン(change-of-state token)」である「o↓」を示す。これにより父親は自分の理解が間違っていたことを認識して、保健師が求めている「子どもの母親」についての状況を述べていくのである。そして、通訳者は20-21行目で保健師に対してトラブルが発生し、その処理を行ったことを報告している。そしてトラブル処理の理由を保健師が「お聞きになられた回答」ではなかったと説明している。

〈A〉の通訳規範を遵守するならば、求められる返答ではないと考えられる場合でも直前の発話内容の訳出を行い、聞き手(保健師)から訂正が行われるべきだが、通訳者はそのようにしなかった。この行為により、通訳者は〈A〉の通訳規範を逸脱しても、〈B〉の通訳規範を遵守することを優先していることがわかった。

6. おわりに

「②トラブルの発生・処理の報告」によって、通訳者がオリジナル発言を発話しているのではなく、発話者の発言を訳出するという志向していることがわかり、それにより、〈A〉の通訳規範は、通訳者とはどのような存在であるかを提示する規範となっていると言える。しかし、「③訂正」の行為によって、通訳者は〈A〉の通訳規範を逸脱しても、〈B〉の通訳規範を遵守することを優先している。このことにより通訳行為の目的は、ただ訳出を行うだけでなく、その場のコミュニケーションの目的を達成させるための相互行為を行っていることがわかる。このような通訳者の行為は、翻訳理論におけるスコポス理論では、翻訳はコミュニケーションの目的を達成させるために行うべきとされており、そのような機能主義的観点に立てば、通訳者自身の自発的発言のその一部は「通訳行為」として捉えることができるのではないかと考える。

参考文献

- Hale, Sandra Beatriz, (2007). Community Interpreting, Hampshire: Palgrave Macmillan. (= 2014, 飯田奈美子編, コミュニティ通訳——オーストラリアの視点による理論・技術・実践, 文理閣.)
- 飯田奈美子 (2016). 対人援助におけるコミュニティ通訳者の役割考察——通訳の公正介入基準の検討, 立命館大学大学院先端総合学術研究科課程博士学位請求論文, 2016.
- Goffman, E. (1981). Forms of talk. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- 水野真木子 (2013). 医療通訳者の異文化仲介者としての役割について, 金城学院大学論集, 10(1): 1-15.
- 灘光洋子 (2008). 医療通訳者の立場、役割、動機について—インタビュー調査をもとに 通訳翻訳研究, 8: 73-95.
- Sacks, H., (1972). An initial investigation of the usability of conversational data for doing sociology. In Sudnow, D. (Ed.), Studies in social interaction, Free Press, 31-73. = [北沢裕・西阪仰 訳(1989). 会話データの利用法, 日常性の解剖学, マルジュ社, 93-173.]
- 佐藤美希 (2005). 英文学研究と翻訳規範——W.B. イェイツ At the Hawk's Well の日本語訳から, 北海道大学大学院国際広報メディア研究 科院生論集 1: 64-82.
- 新崎隆子 (2010). 通訳のコミュニケーション調整仮説——英日逐次通訳の事例から. 青山学院大学大学院国際政治経済学研究科国際コミュニケーション専攻 2010 年度博士論文.
- 瀧本真人 (2006). AUSIT 倫理規程と通訳者の行動—ビジネス分野におけるダイアログ通訳の場合, 通訳研究, 6: 143-154.
- Toury, Gideon., (1995), Descriptive Translation Studies and Beyond, Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
- 吉田 理加(2007). 法廷相互行為を通訳する —法廷通訳人の役割再考—, 通訳研究, (7) 19-38.